

# 『源氏物語』 「桐壺」 意象考

*The Tale of Genji: Chinese Literary Imagery of Paulownia in the Kiritsubo*

張 培 華  
ZHANG Peihua

【要旨】本稿は、古代中国の文学理論である意象論の視点から、『源氏物語』桐壺」巻における「桐壺」や「淑景舎」及び「光る君」に関わる関係を考察したものである。

従来では「桐壺」は「淑景舎」の通称であるが、果たしてそれはいつから発生したのか。本稿はまずその史実の信憑性について徹底的に検証した。その結果、『源氏物語』以前の文献には、どこにも見えず、例えば、『源氏物語』より先に完成した『枕草子』や男性貴族の漢文日記にも「桐壺」という表現は見当たらない。史実の名称である「淑景舎」は『源氏物語』「桐壺」からの記録していたことを明らかにした。いわゆる「桐壺」は「淑景舎」の通称という由来の分水嶺は、『源氏物語』第一帖「桐壺」からの始発であることは明白である。つまり「桐壺」は、作者の紫式部が文学的に作られたものである。なぜ紫式部は文学的に「桐」にこだわり、淑景舎の庭に植えたのか。『源氏物語』以前の日本古典文学における「桐」の実態を考察した結果、おもに古代中国の『詩経』に書かれているように、「桐」と「琴」が繋がっている表現を明らかにした。しかし、「桐壺」に登場された「桐」は、先行文学における「桐」と「琴」の関係が見えず、紫式部が用いた「桐」は別な手法である。それは古代中国の文学理論である意象論の方法と考えられる。意象論は作者がある特定の事物の表象を借りて、自ら意識と情緒を表現する方法である。すなわち作者が詩的な悲しい「桐」の意象を受けて、特に白居易の宮

廷に「桐」を移植する発想から、淑景舎の庭に「桐壺」を定めたと考察した。また詩賦における悲的な「桐」は春になると、生い茂る意象から、悲恋である桐壺帝と桐壺更衣の間に生まれた「光る君」の素晴らしい将来を象徴することと考察した。すなわち主人公である源氏と藤壺の間に生まれた子が素晴らしい将来を暗喩しているのであろう。

## 一 はじめに

第一巻である「桐壺」巻の研究については、多方面から論究されてきた<sup>〔1〕</sup>。しかしながら、古代中国の文学理論である意象論による研究はまだに見えない。意象論とは何か、紫式部はどのように意象論を援用して『源氏物語』「桐壺」を創出したのか。そこで本稿では、作者の紫式部が如何に詩的な孤独である「桐」の意象を利用して、極めて悲しい「桐壺」物語を創出したことを考察してみたい。

## 二 問題提起…史実の淑景舎と文学の桐壺

作者の紫式部が最初に書いた「桐壺」という名称は次のような一文である。引用の本文は、新編日本古典文学全集による、文末に巻名と頁数を示した。傍線等は稿者が付けたものである。以下同。

御局は桐壺なり。

(桐壺・二〇頁)

右の文は、源氏の母親が住んでいる場所である。つまり傍線を付けた「桐壺」は、作者の紫式部が物語の中に書いたものであるから、必ずしも歴史の事実とは言えない。ところが、この「桐壺」については、従来の研究では、『源氏物語』以後の歴代から現代まで、史実の内裏の中の「淑景舎」の「通称」と解釈している。ここで注意したいポイントは、「桐壺」が「淑景舎」の「通称」となった時期は、『源氏物語』以前であろうか、それとも『源氏物語』以後であろうか。つまり「桐壺」は、そもそも「淑景舎」の「通称」であるのか。それとも『源氏物語』「桐壺」に基づいて、後人が付けたのか。どちらが先であろうか。

結論から先に言えば、『源氏物語』以前、どこにも「桐壺」が存在せず、「桐壺」は紫式部が作られた文学的な「桐壺」意象ではないだろうか。

この点について、もっと詳しく考察してみたい。  
十分留意したいことは、いままで残された『源氏物語』以前の文献には、「淑景舎」が見えるが、「桐壺」が見当たらないということである。

例えば、一条天皇の時代、正暦二年(九九一)―二月九日、淑景舎に遷御した記録は、『日本紀略』の中で次のように見える。引用漢文の表記は常用漢字に直した(以下の漢文文献も同様)。

日本紀略後篇九 一条(正暦二年)十二月

九日甲戌。天皇移<sup>二</sup>御撰政宿所淑景舎<sup>一</sup>。諸御殿上人有<sup>二</sup>被物祿物等事<sup>三</sup>。

また長保四年(一〇〇二)、上級貴族である藤原行成の漢文日記『権記』の中で、「桐壺」は見えず、「淑景舎」については次のような記載がある。

権記第二 長保四年八月

三日、丙寅、前大僧正參東宮、給御馬、依宣耀殿被平復也、今日物忌、

臨昏為文朝臣来告、淑景舎君於東三条奉東対御曹司頓滅云々、聞悲

無極、

〔前大僧が東宮の許に参った。御馬を下給された。宣耀殿(藤原<sup>せんやうでん</sup> 敏子)が平復されたことによるものである。今日は物忌である。

黄昏に臨んで、(源)為文朝臣が来て、告げたことには、淑景舎君(藤

原<sup>もろこ</sup> 敏子)が、東三条第の東対の御曹司において頓滅しました〕

と云うことだ。聞いて悲しんだことは、極まり無かつた。〕

以上に引用したように、漢文だけではなく、仮名文における「桐壺」という名称は、『源氏物語』以前の作品には、どこにも見当たらない。また「淑景舎」の場合、『源氏物語』以前の和文、例えば、『竹取物語』『古今和歌集』『伊勢物語』『土佐日記』『後撰和歌集』『大和物語』『平中物語』『蜻蛉日記』『宇津保物語』『落窪物語』『拾遺和歌集』『和泉式部日記』などの作品には、いずれも「桐壺」と「淑景舎」は見えない。ところが、興味深いことは、『源氏物語』より直前成立した『枕草子』の中には「桐壺」が見えないが、「淑景舎」がいくつかの章段の中で登場されているのである。田中重太郎『校本枕草子』によると、塚本だけには「淑景舎」が見えず、他の能因本には「淑景舎」が八箇所、三巻本にも八箇所、前田本には七箇所がある。では、これらの「淑景舎」は、『枕草子』の中で、どのように書かれていたのか。確認のため、現時点までよく引用されてきた

三卷本における淑景舎に関する部分を取り上げてみてみよう。引用文は新編『日本古典文学全集』『枕草子』（小学館）による。段数と段名および頁数を示した。冒頭文の数字と傍線は稿者が付けたものである。以下同。

①第八六段 宮の五節出ださせたまふに

宮の五節出ださせたまふに、かしづき十二人、こと所には女御、御息所の御方の人出だすをばわるき事になむすると聞くを、いかにおぼすにか、宮の御方を十人は出ださせたまふ。いま二人は、女院、淑景舎の人、やがてはらからどちなり。

(二六九～二七〇頁)

②第八九段 無名といふ琵琶

「無名」といふ琵琶の御琴を、上の持てわたらせたまへるに、見などして、かき鳴らしなどす」と言へば、弾くにはあらで、緒などを手まさぐりにして、「これが名よ、いかにとか」と聞えさするに、「ただいとはかなく、名もなし」とのたまはせたるは、なほいとめでたしとこそおほえしか。

淑景舎などわたりたまひて、御物語のついでに、「まろがもとにいとをかしげなる笙の笛こそあれ。故殿の得させたまへりし」とのたまふを、

(二七五～二七六頁)

③第二〇〇段 淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など

淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など、いかが、めでたからぬことなし。正月十日にまゐりたまひて、御文などはしげう通へど、まだ御対面はなきを、二月十日余日、宮の御方にわたりたまふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ心ことにみがきつくるひ、女房など、みな用意したり。

④前同

まだこなたにて御髪などまゐるほど、「淑景舎は見たてまつりたりや」と問はせたまへば、「まだいかでか。御車よせの日、ただ御うしろばかりをなむはつかに」と聞ゆれば、「その柱と屏風とのもとに寄りて、わがうしろよりみそかに見よ。いとをかしげなる君ぞ」とのたまはするに、うれしく、ゆかしさまざりて、いつしかと思ふ。

(二〇〇頁)

⑤前同

障子のいと広うあきたれば、いとよく見ゆ。上は白き御衣ども、紅の張りたる二つばかり、女房の裳なめり、ひきかけて、奥に寄りて、東向きにおはすれば、ただ御衣などぞ見ゆる。淑景舎は北にすこし寄りて、南向きにおはす。

(二〇一頁)

⑥前同

めでたき御ありさまをうち多みつ、例のたはぶれ言せさせたまふ。淑景舎の、いとうつくしげに絵にかいたるやうにてゐさせたまへるに、宮はいとやすらかに、いますこし大人びさせたまへる御けしきの、紅の御衣にひかり合はせたまへる、なほたぐひはいかでかと見えさせたまふ。

(二〇二頁)

⑦前同

御むかへに、女房、東宮の侍従などいふ人もまゐりて、「とくとそそのかしきこゆ。「まづ、さは、かの君わたし聞えたまひて」とのたまはすれば、「さりともいかでか」とあるを、「見送りきこえ

む」などのたまはするほどにも、いとめでたくをかし。「さらば遠きを先にすべさか」とて、淑景舎わたりたまふ。殿など帰らせたまひてぞのぼらせたまふ。道のほども、殿の御さるがう言にいみじ笑ひて、ほとほとうち橋よりも落ちぬべし。

(二〇七〜二〇八頁)

⑧ 第二六〇段 関白殿、二月二十一日に、法興院の

さて、まことに寅の時かと、装束きたちてあるに、明け果て、日もさし出でぬ。「西の対の唐廂に、さし寄せてなむ乗るべき」とて、渡殿へある限り行くほど、まだうひうひしきほどなる今まありなどは、つつましげなるに、西の対に殿の住ませたまへば、宮もそこにおはしまして、まづ女房ども、車に乗せさせたまふを御覧ずとて、御簾の内に、宮、淑景舎、三、四の君、殿の上、その御おとと、三所立ち並みおはしまさぶ。

(三九四〜四〇五頁)

右に傍線を付けた八つの「淑景舎」については、場所としての名所とその「淑景舎」に住んでいる人を指す意味である。清少納言は八回の「淑景舎」を書いたが、一回も「桐壺」を書いてなかったから考えて、少なくとも『源氏物語』直前、いわゆる「桐壺」は「淑景舎」の通称とは言えないだろう。つまり「桐壺」が「淑景舎」の通称になった原因は、『源氏物語』「桐壺」からと考えられる。なぜかという点、もし『源氏物語』以前にすでに、「桐壺」と呼ばれていたとするならば、「淑景舎」の通称として事実であるならば、それは清少納言が『枕草子』の中で繰り返して八回の「淑景舎」を使わず、「桐壺」を使うべきではないだろうか。逆に言うところ、清少納言が「桐壺」を使っていないから、当時の史実の淑景舎を「桐壺」という通称が存在せずと考えることは矛盾ではないだろう。なぜなら、

史実の南の飛香舎の庭には「藤」があり、北の凝華舎の庭に「梅」があるので、いわゆる「藤壺」と「梅壺」は、いずれも『枕草子』の中には登場されているからである。例えば、下記の傍線を付けた第一二四段には「藤壺」が見える。

第一二四段 関白殿、黒戸より 出でさせたまふとて

山の井の大納言、その御つぎつぎの、さならぬ人々、黒き物をひき散らしたるやうに、藤壺の塀のもとより、登華殿の前までお並みたるに、ほそやかにまめかして、御佩刀などひきつくるはせたまひ、やすらはせたまふに、宮の大夫殿は、戸の前に立たせたまへば、ゐさせたまふまじきなめりと思ふほどに、すこし歩み出でさせたまへば、ふとゐさせたまへりしこそ。

(二三四〜二三五頁)

また次の章段には、梅壺も登場している。

第七九段 返る年の二月二十余日

返る年の二月二十余日、宮の、職へ出でさせたまひし御供にまゐらで、梅壺に残りぬりましたの日、頭中将の御消息とて、「昨日の夜、鞍馬に詣でたりしに、今宵方のふたがりければ、方違へになむ行く。まだ明けざらむに、帰りぬべし。かならず言ふべき事あり。いたうたたかせで待て」とのたまへりしかど、「局に一人はなどてあるぞ。ここに寝よ」と、御匣殿の召したれば、まゐりぬ。

(一四〇〜一四一頁)

これらの「藤壺」と「梅壺」は、それぞれ「飛香舎」と「凝華舎」を指す意味である。それは南の飛香舎の庭に藤があり、北の凝華舎の庭に梅があるからである。実際に存在している藤壺と梅壺の名称があるから、清少納言が「飛香舎」と「凝華舎」を使わず、「藤壺」と「梅壺」を使用した

と考える。もし当時では「淑景舎」の通称は「桐壺」である事実なら、清少納言が「藤壺」と「梅壺」と同じように、「淑景舎」より「桐壺」を使うはずであろう。しかし前掲したように、清少納言は『枕草子』の中で八回「淑景舎」を述べたが、一回も「桐壺」を使わないことからみると、少なくとも「源氏物語」が成立する前の「淑景舎」の通称は「桐壺」とは言えないだろう。

また当時の男性貴族たちの漢文記録の中にも同じように、「桐壺」は見えず、「藤壺」と「梅壺」は見られる。例えば、一例をあげて、『小右記』と『御堂関白記』の記録を確認しておきたい。まず『小右記』永祚元年（九八九）二月二三日における「藤壺」と天元五年（九八二）正月三日における「梅壺」の記録は次のように見える。

『小右記』【藤壺・梅壺】

永祚元年二月

廿三日、(中略)宣命了余自宿所向化徳門辺、待内大臣自藤壺来、会同門、

〔二十三日、(中略)宣命が終わって、私は宿所から和徳門の辺りに向かった。内大臣が藤壺から来るのを待って、同門に会した。〕

天元五年正月

三日、丙申、(中略)参議佐理相率参入内、於梅壺上直廬有盃酒、  
〔三日、丙申、(中略)参議(藤原)佐理が、連れだって内裏に参入した。女御(藤原詮子)の梅壺の上直廬に於いて盃酒が行なわれた。〕

また『御堂関白記』寛弘元年(一〇〇四)正月一七日における「藤壺」と長和二年(一〇一三)十二月九日における「藤壺」と「梅壺」の記録を次のように確認ができる。

『御堂関白記』【藤壺・梅壺】

寛弘元年正月

十七日、壬寅、渡三東条、見造作、一宮参内給、藤壺東面御座、

〔十七日、壬寅。東三条第に行つて、造営を檢分した。一宮(敦康親王)が内裏に参入された。飛香舎の東面を御在所とされた。〕

長和二年十二月

九日、丙寅、(中略)光榮朝臣、候宿、藤壺与梅壺間度殿盜来、

〔九日、丙寅。(中略)光榮朝臣が奉仕した。候宿した。藤壺(飛香舎)と梅壺(擬華舎)の間の渡殿に盗人が入った。〕

以上のように、『枕草子』『小右記』『御堂関白記』における「藤壺」と「梅壺」の表現が見えるが、従来では「淑景舎」の通称である「桐壺」は、『枕草子』にも『小右記』にも、『御堂関白記』にも見当たらない。このように、少なくとも『源氏物語』が成立する前は、「淑景舎」の通称としての「桐壺」という名称は存在しないと言えるだろう。

いわゆる「淑景舎」の庭には「桐」があるから、「桐壺」としての通称の説は、『源氏物語』『桐壺』から発生した俗説であろう。すなわち『源氏物語』『桐壺』の描写の影響により、史実の「藤壺」と「梅壺」と同じように、『源氏物語』以後の学者らが、史実の「淑景舎」を「桐壺」という俗称を付けたのではないだろうか。

例えば、平安時代における『倭名類聚抄』については、一つの後人からの増補の用例と言えるだろう。周知のように、『倭名類聚抄』底本は、二種類がある。いわゆる「十卷本」と「二十卷本」がある。確かに、「十卷本」には「桐壺」が見えず、「二十卷本」では「桐壺」があるだけでなく、後宮の淑景舎(桐壺)、飛香舎(藤壺)、擬華舎(梅壺)などの五舎が揃ってきたのである。「十卷本」に見えない部分については、かつて澤瀉久孝

が狩谷楳斎『箋注倭名類聚抄』『解題』の中で、次のように述べている。

これら十巻本にないところは、顕昭、仙覚、卜部兼永、源善成等の中世の諸学者で、本書をその著作中に引用してゐる人々が、それらの部分のみは、一つも引用してゐない点から察して、これらは後の増補とみるべく、十巻本が原形を伝へたものと認められる。

以上の説を合わせて、前述したように、『源氏物語』直前に書かれた『枕草子』の中には、はっきり「飛香舎」を「藤壺」と表記。また「凝華舎」を「梅壺」と表記。しかし、「淑景舎」を八回に書いて、「桐壺」を一回も書かないということは、清少納言の時代では、史実「淑景舎」は「淑景舎」しか使わないのではないだろうか。

以上のように、現時点の文献からみると、始めて「淑景舎」を「桐壺」と称した人は、作者の紫式部である。すなわち最初の「桐壺」の文献は、『源氏物語』『桐壺』と言える。そして、『源氏物語』以後、つまり平安後期から、鎌倉時代、室町時代、江戸時代、明治時代、昭和時代、平成時代及び今までの「淑景舎」の通称が「桐壺」という解釈はありうることだろう。しかし、注意しなければならないことは、『源氏物語』以前、「淑景舎」は「桐壺」とは言わず、紫式部の『源氏物語』『桐壺』が出てきてから、後に「淑景舎」は「桐壺」という俗称を付けたということである。これは前に述べた「二十巻本」「倭名類聚抄」本文と同じように、『源氏物語』以後の学者らが『源氏物語』『桐壺』に基づいて平安京の内裏を復元する際に増補した説しか考えられない。

ところが、なぜ紫式部が「桐壺の更衣」の住む庭の中で、文学的に「桐」を植えたのか。また登場人物の「桐壺帝」「桐壺更衣」「光る君」らほどのように「桐」と関わっているのか。これらの疑問点が本論の中心内容である。本論に援用した理論は、古代中国の文学理論である意象論である。

紫式部が物語を創作するために、詩的な悲しい「桐」の意象を受けて、特に白居易と元稹の間の「桐」に関わる詩的な「桐」の意象の受容によって、桐壺更衣の庭に「桐」を植え、「桐壺帝」と「桐壺更衣」の悲恋の間に生まれた「光る君」の立派な将来を象徴する物語を創出したと理解される。

### 三 『源氏物語』以前の桐の表現

なぜ作者の紫式部は「淑景舎」の庭に「桐」を植えたのか。それは手法としての一つは文学的な発想である。例えば、すでに新聞一美が指摘されてきたように、『白氏文集』『長恨歌』にも「桐」と繋がることは否定できないが、それだけではなく、作者が全面的に「桐」という文学的な悲しい意象を受けて「桐壺」物語を創られたと考えられる。まず確認しておきたいことは、『源氏物語』以前、日本古典文学における「桐」の表現はいかがであるう。

遡ってみると、『古事記』と『日本書紀』には「桐」が見つからない。『万葉集』では「桐」が一箇所。それは次のようになる。本文は新編日本古典文学全集による。

#### 『万葉集』巻第五「八〇九」

直に逢はず あらゆるも多く しきたへの 枕去らずて 夢にし見えむ

おほむねのひとと  
大伴淡等の謹状

梧桐の日本琴一面 対馬の結石山の孫枝なり

この琴、夢に娘子に化りて曰く、「余、根を遥島の崇き巒に託け、幹を九陽の休しき光に晡す。長く煙霞を帯らして、山川の阿に逍遙し、遠く風波を望みて、雁木の間に出入す。ただ百年

の後に、空しく溝壑に朽ちなむことのみを恐る。偶に良き匠に遭ひ、割りて小琴に為られぬ。質麁く音少なきことを顧みず、恒に君子の左琴とあらむことを希ふ」といふ。

(一一四～一二五頁)

右では、藤原房前が書状に付けて送ったのは「桐」で作られた「琴」である。この「桐」は和歌に詠まれていない。また『風土記』では「桐」は出雲国にしか見えない二種類の「赤桐」と「白桐」がある。引用文は前同。

出雲国風土記(意字の郡)

凡そ諸の山野に在らゆる草木は、麦門冬、独活(中略)杉、字或は楢に作る。赤桐、白桐、楠、椎、海榴、字或は楢に作る。

(一一五三頁)

さらに奈良時代、平安時代における日本漢詩文における「桐」を捜してみると、『万葉集』における「桐」と似ているような「琴」を作る材料の表現が見える。例えば、『懷風藻』では「桐」が一箇所。作者は境部王である。引用文は日本古典文学大系による。

五言 一首 五言 一首

秋夜宴山池

秋夜山池に宴す

対峰傾菊酒 峰に対かひて菊酒を傾け、

臨水拍桐琴 水に臨みて桐琴を拍つ。

忘帰待明月 帰を忘れて明月を待つ、

何憂夜漏深 何ぞ憂へむ夜漏の深けむことを。

(一一六頁)

右の詩は、境部王が二十五歳で書いた作であるが、詩作の通りに「桐」は、「琴」の木材である。このような「桐」と「琴」に繋がる表現は、菅原道真の『菅家後集』巻十三第四七七首「詠<sub>二</sub>樂天北窓三友詩<sub>一</sub>」にも見え

る。引用文は前同。

酒何以成桐和水 酒は何を以てか成す 麴水に和す

琴何以成桐播糸 琴は何を以てか成す 桐糸を播す

(四七八頁)

右の詩における「桐」と「糸」を合わせて「桐糸」のフレーズは、古代中国の詩句の中にも見られる。すなわち「琴」の「弦」を指す意味である。菅原道真の「桐」の意象は、前掲した『懷風藻』における一箇所「桐琴」の「桐」と一致している。つまり琴の好材料の意象である。

漢詩文だけでなく、和文である『源氏物語』以前の物語や日記文学における「桐」を確認してみると、多いとは言えない。例えば、『竹取物語』では、「桐」が見えず、また『土佐日記』にも見えない。ただ『うつほ物語』「俊蔭」の中には一箇所「桐」が見える。それは次のような場面である。引用文は新編日本古典文学全集による。

俊蔭、いさをしき心、速き足をいたして行くに、からくしてその山に至りて、見渡せば、千丈の谷の底に根をさして、末は空につき、

枝は隣の国にさせる桐の木を倒して、割りこづくる者なり。(中略)

この罪を免れむために、倒さるる木の片端をたまはりて、年ごろ

勞せる父母に、琴の声を聞かせて、そのめいとなさむ」といふとき

に、阿修羅、いやますます怒りていはく、

(二四～二七頁)

傍線を付けたように、倒れた「桐」は、「琴」の声を聞くため、琴を作る材料である。清少納言『枕草子』第三五段「木の花は」の章段にも、やはり「桐」の優れたことに「琴」を作るといふ表現が繋がっている。引用文は前同。

第三五段 木の花は

桐きりの木の花、紫に咲きたるは、なほをかしきに、葉のひろごりざまぞうたてこちたけれど、こと木どもとひとしう言ふべきにもあらず、唐土たうどに名つきたる鳥の、選りてこれにのみあるらむ、いみじう心ことなり。まいて琴ことに作りて、さまざまなる音の出で来るなどは、をかしなど、世の常に言ふべくやはある。いみじうこそめでたけれ。

(八七～八八頁)

以上のように、『源氏物語』以前の日本古典文学における「桐」の描写はそれほど多くはなかった。少数の作品の極めて少ない表現からみると、主に『風土記』における出雲国には「赤桐」と「白桐」が存在すること。『万葉集』における「桐」は和歌に詠まれた歌語ではない。また奈良時代から平安中期までの代表的な漢詩文における「桐」も少ないが、その「桐」の意味は、平安時代の仮名文学において極めて少ない「桐」と清少納言が書いたように、よく音が出るような琴の木材の役割である。実際、桐と琴の繋がる歴史の典拠は、古代中国の文学典籍である『詩経』「鄘風」にも見られる。

定方之中	定 <small>てい</small> の方に中 <small>ちゆう</small> するとき
作 <small>二</small> 于楚宮 <small>一</small>	楚宮 <small>そきゆう</small> を作 <small>つく</small> する
揆 <small>レ</small> 之以 <small>レ</small> 日	之 <small>これ</small> を揆 <small>はか</small> るに日 <small>ひ</small> を以 <small>もつ</small> てし
作 <small>二</small> 于楚室	楚室 <small>そしつ</small> を作 <small>つく</small> する
樹 <small>レ</small> 之 <small>レ</small> 椽栗	之 <small>これ</small> に樹 <small>う</small> ふるに椽栗 <small>しんりつ</small> をもつてし
椅桐梓漆	椅 <small>い</small> ・桐 <small>とう</small> ・梓 <small>し</small> ・漆 <small>しつ</small> をもつてし
爰伐琴瑟	爰 <small>こゝ</small> に伐 <small>き</small> りて琴瑟 <small>きんじつ</small> とせん

以上のように、日本古典文学における「桐」に関わる琴の木材の典拠は『詩経』における「桐」の説と一致している。しかし、『源氏物語』「桐

壺」における「桐」は、桐壺更衣の居場所である。すなわち「御局は桐壺なり」という表現である。つまり更衣の邸の庭には「桐」の樹があるだけである。特に前後の文脈からみると、「琴」を作る木材の桐とは関係なさそうである。つまり作者の紫式部の意図は、更衣の住んでいる邸の庭には「桐」があり、更衣と「桐」と関わる関係を表したのである。

では、紫式部はいったい何を念頭に置いて、物語の中で「桐」を想定したのか。この疑問点の考察は次の節に譲りたい。

#### 四 意象論から見た「桐」の悲しい意象

なぜ紫式部は「桐壺」の「桐」を想定したのか。この点について、古代中国の文学理論である意象論に従って、新たに解釈することができる。それは作者が意識的に悲しい「桐」の意象を利用して悲劇的な「桐壺帝」と「桐壺更衣」及び「光る君」らの物語を暗喩した方法と考える。

では、意象論とは何か。まずこの点を説明しなければならない。

古代中国の文学理論としての意象論の起源は、中国の古典である『易経』の八卦の「卦象」である。すなわち陰(☷)と陽(☰)の二爻(こう)の符号を組み合わせて、八卦における乾(けん)☰、兌(だ)☱、離(り)☲、震(しん)☳、巽(そん)☴、坎(かん)☵、艮(こん)☶、坤(こん)☷の符号は、それぞれの天(てん)、沢(たく)、火(か)、雷(らい)、風(ふう)、水(すい)、山(さん)、地(ち)の自然の現象を指す卦象である。このような符号の形で具体的な物象を表す原理から、象形文字としての言語(言)で、具体的な事物や自然物などの表象(象)を表して、作者自らの意識(意)を表現することが意象論の本質である。例えば、『易経』「繫辞上伝」には、次のような「言」「意」「象」の論説がある。



子曰、書不<sub>レ</sub>尽言、言不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意。然則聖人之意、其不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>見乎。

子曰、聖人立<sub>レ</sub>象以<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意、設<sub>レ</sub>卦以<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>情偽<sup>一</sup>、繫<sub>レ</sub>辭焉以<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>其言<sup>一</sup>、変而通<sub>レ</sub>之<sup>一</sup>以<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>利、鼓<sub>レ</sub>之舞<sub>レ</sub>之<sup>一</sup>以<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>神。

子曰く、書は言を尽くさず、言は意を尽くさず。然らば則ち聖人の意は、其れ見る可からざるか、と。子曰く、聖人は象を立てて以て意を尽くし、卦を設けて以て情偽を尽くし、辞を繫けて以て其の言を尽くし、変じて之を通じ以て利を尽くし、之を鼓し之を舞して以て神を尽くす、と。<sup>16)</sup>

右のように、簡単に言うくと、象を立てて、言葉の表現で満足できない部分の意味を表すという考え方である。

古代中国の文学理論の白眉と言われた『文心雕龍』（平安中期『日本国見在書目録』に記載）「神思」篇の中で、初めて意と象をまとめて「意象」と定めた。

然後使<sub>下</sub>玄解之宰、尋<sub>二</sub>声律<sub>一</sub>而<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>墨、独照之匠、闕<sub>二</sub>意象<sub>一</sub>而運<sub>上</sub>斤。以蓋馭<sub>レ</sub>文之首術、謀<sub>レ</sub>篇之大端。

然る後、玄解の宰をして声律を尋ねて墨を定めしめ、独照の匠をして意象を闕つて斤を運らしむ。此れ蓋し文を馭するの首術にして、篇を謀るの大端なり。<sup>17)</sup>

『文心雕龍』以後、歴代の詩格の中では意象については論じられてきた。例えば、唐代の司空図の『二十四詩品』の「縝密」には「意象欲<sub>レ</sub>生、造化已奇」がある。ここで注意したいことは、日本の詩論書の開祖と言われた平安初期『文鏡秘府論』には、興味深くことに「意」と「象」を論じている。例えば「地巻」の最後に「九意」があり、また「南巻」には「論文意」がある。「九意」は春、夏、秋、冬、山、水、雪、雨、風の九つの自然物に関する現象である。また「論文意」では、次のような論述がある。

四時氣象、皆以<sub>レ</sub>意排<sub>レ</sub>之、令<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>次序<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>兼<sub>レ</sub>意說<sub>レ</sub>之為<sub>レ</sub>妙。<sup>18)</sup>

以上の論説は、意象論の論旨と似ている。つまり四季の現象を表す場合、作者の意識によって前後の並び、心の意思を兼ねて叙述することが妙になる。事物や自然物、動物、植物などの表象を借りて、作者自らの意識と情緒を融合させたことが意象論の焦点である。

要するに、事物、自然物などの対象はそのまま作品の中で映すだけでなく、作者の意識や情緒が浸透した意象である。二十世紀八十年代から中国では意象論の研究は文学、映画、音楽、美術、書道、心理学、神経美学などの多くの領域で活躍している。

以上の意象論の視点からみると、なぜ紫式部が「桐壺」の「桐」を想定したのか。この点を解くために、「桐」が登場した「御局は桐壺なり」の前後文脈の意味を確認することが必要である。文頭の数字は稿者が付けたものである。引用は前同。

①はじめよりおしなべての上宮仕したまふべき際にはあらざりき。おほえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びのをりをり、何ごとにもゆゑあることのふしぶしには、まづ参上らせたまふ、ある時には、大殿籠りすぐしてやがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前さらずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この皇子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この皇子のゐたまふべきなめりと、一の皇子の女御は思し疑へり。人よりさきに参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおあはしませば、この御方の御諫めをのみぞなほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひける。

②かしこき御陰をば頼みきこえながら、おとしめ疵を求めたまふ人

は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。

③御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて隙なき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふもげにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきるをりをりは、打橋、渡殿のここかしこの道にあやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾たへがたくまなきこともあり、また、ある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせてはしたなめわづらはせたまふ時も多かり。事にふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いとう思ひわびたるをいとどあはれと御覽じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司をほかに移させたまひて、上局に賜す。その恨みましてやらむ方なし。

(一九一—二〇頁)

①ある更衣はほかの女御より極めて帝に寵愛され、皇子が生まれてから、ますます帝に愛されている。すでに第一皇子を生んだ妃やほかの女御からの嫉妬や迫害が強くなり、帝の特別な愛に対して、この更衣はだんだん苦しくなる状態である。②更衣はますます体も心も弱くなってきた。このような周りに助けられる人はいないような苦しい状況の中で、③居場所の庭には「桐」があるということである。ほかの女御たちのいじめはますます強くなり、道の中の汚れ物で、衣の裾を汚したり、出入口を閉めたり、仕方なく、帝が近くに住むところに移ったが、以前に住んでいる人からも怒られた。

このような①②③の哀調を帯びた帝との悲恋である更衣の極めて孤独、無援、苦しい状態の中で、「桐壺」が登場している。この「桐壺」については、かつて藤井貞和は次のように述べている。

かなり離れたところにいる、つまり身分が低いから離れたところにいるのだと解釈する人もいます。この更衣が桐壺にいるということには、もつと別のこめられた意味があるかもしれませぬ。私としては必ずしも確かめられていない段階です。

正しく藤井貞和が分析された通りに、おそらく作者が「桐」を想定したことは、詩的な悲しい「桐」の意象を受けて、桐壺更衣と桐壺帝の悲恋の物語を暗示したのではないだろうか。なぜなら意象論の視点からみると、「桐」に悲しい意象があるからである。例えば、作者が「桐壺」巻の中で繰り返し引用された『白氏文集』巻十二感傷詩「〇五九六」長恨歌」の中に登場された「梧桐」は哀感をそそる意象が見える。

春風桃李花開日  
秋雨梧桐葉落時

春風 桃李 花開く日、  
秋雨 梧桐 葉落つる時。

右の「桐」は、葉が落ちてさらに雨を浴びて、秋の哀愁を催す意象が目の前に湧いてくる。菅原道真がこの詩句を、「葉落梧桐雨打時」(葉の落つる梧桐は雨の打つ時)と変容して引用されている。菅原道真が、白居易の「秋雨」より「雨で打つ」に変えて、いっそう悲しい「桐」の意象が深められた。この「桐」に関わる「秋の悲哀」について、新聞一美は次のように述べている。

この巻名が「長恨歌」の「秋雨梧桐葉落時」を意識して生まれたとするならば、そこにははかなくも散った更衣の姿と帝の「秋の悲哀」とが象徴されていると言える。つまりこの巻名は一面で更衣の生と死、及び帝の愛と悲哀を象徴し、一面でその忘れ形見である光源氏の生活基盤を表していることになる。主人公をその父母との関連から紹介するという巻の内容に、実にふさわしい巻名なのである。

確かに新聞一美の指摘は否定できないが、ただ作者の紫式部はこの一箇所「桐」だけでなく、総合的な悲しい「桐」の意象から「桐壺」を設定したと考える。前掲した①②③のように、特に文学的な「孤桐」の意象については、桐壺帝と桐壺更衣に関する孤立の状況に深く投影したと見える。つまり紫式部の手元の古典文学における悲しむ「孤桐」の意象を重ねて受けて、強く意識して悲恋の更衣を「桐壺」に造形したと考えられる。文学的な「孤桐」の意象はしばしば古代中国の典籍の中に登場している。例えば、『書経』「禹貢」篇には、次のような「孤桐」がある。

嶧陽孤桐 嶧の陽は孤桐なり

泗濱浮磬 泗濱は浮磬なり

おそらく孤立である桐の樹幹から、詩語としての「孤桐」意象が誕生したのだろう。唐詩の中には「孤桐」を引用した詩作は幾つか見える。典型な例を挙げてみると、白居易が書いた「雲居寺孤桐」（雲居寺の孤桐の詩）（『白氏文集』巻一諷諭詩「〇〇一一」に収録）詩があり、次のような「孤桐」の意象が見える。

四面無三附枝 四面 附枝無く、

中心有三通理 中心 通理有り

右の孤桐の意象から見ると、前掲した③のように、いじめられた桐壺更衣の孤独、無援、苦しいが、心の中に桐壺帝の深愛を受けている姿は詩的な「孤桐」の意象と類似していることが読み取れる。

以上のように、作者が総合的な悲しい「孤桐」の意象を受けて、さらに白居易と親友の元稹の間に「和答詩」に関する悲しむ「桐の花」の意象を重ねて、強いて意識して孤立、無援である更衣の居場所の淑景舎の庭に文学的に「桐を植えた」動機が見える。

『白氏文集』巻二諷諭詩「〇〇一一」に「和答詩」には一〇首がある。そ

のうち、第三首は「〇一〇三」答三桐花一詩がある。それは左遷された元稹が途中で、地面に落ちた桐の花がさびれている風景を見て、自ら下げられた身分を感興して思わず「桐花」詩（『元氏長慶集』巻一に収録）を書いて白居易に送ったのである。そして白居易が元稹の「桐花」詩に對して、「答三桐花詩一」を贈答したのである。両詩とも長いが、ここで注目したい詩句のみを取り上げて置きたい。

まずは元稹の不遇な孤独の桐の花に関する次のような詩句がある。

尔生不得所 尔生きて所を得ざれば、

我願裁為琴 我願はくは裁ちて琴を為り、

安置君王側 君王の側に安置して

調和元首音 元首の音を調和せしめんことを。

前掲したように、日中古典文学における桐の一つ表現は琴を作る好材料である。そして元稹の詩句の意味は、不遇な山の中の桐を裁断して、よい曲を出る琴を作って、君王の側において置くという意思である。

ところが、次の白居易の「答三桐花一詩」の詩句に注目したい。

我思五丁力 我は思ふ 五丁の力もて、

拔入九重城 抜きて九重の城に入れんことを。

当三君正殿栽 君が正殿の栽に当つれば、

花葉生三光晶 花葉に光晶を生ぜん。

十分留意したいのは、三句の目には、白居易は元稹と違って、使った動詞には、「裁断」の「栽」ではなく、「栽培」の「栽」に変えたということである。白居易の意思は、岡村繁の次のような解釈の通りである。

私は思うのだが、かの蜀の五人の怪力士の手で、この木を引き抜いて奥深い天子の宮殿に移植させたいものだ。これを君主の正殿の植え物に充てたなら、その花も葉もきらきらと光り輝くことだろう。

以上のように、作者の紫式部が孤立、無援、悲しい更衣の居場所である淑景舎の宮廷の庭に「桐」を植えた動機の根底は、白居易と元稹の桐の花に関わる悲しむ桐の意象からの発想ではないだろうか。だから、桐壺と桐壺更衣の悲恋の結晶である「光る君」がきらきら輝いているのだろう。

## 五 悲しむ「桐壺」と素晴らしい「光る君」

従来研究では、桐壺巻における二箇所「光る君」については、多種多様な角度から優れた論考が積み重ねてきた。ところが、前述したように、意象論の視点からみると、まだ新たに開拓する空間は残されている。この点について、少し詳しく述べたい。

桐壺巻には「光る君」は二箇所ある。そのうち一箇所は、次のような場面である。

世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌かたちにも、なほにははしさはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おほえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。

(桐壺・四四頁)

藤井貞和の説によると、右の「かかやく日の宮」の「日」は、太陽ではなく、藤壺のことを指すように、月の光と考えられる。つまり作者の紫式部は、悲恋である桐壺帝と桐壺更衣の間に生まれた主人公である源氏の光る君と桐壺更衣と似ている藤壺の間に輝く将来のことを暗示していることが読み取れる。

もう一箇所「光る君」は、下記のような桐壺巻の巻末の本文である。

光る君といふ名は、高麗人のめできこえてつけたてまつりけるとぞ言ひ伝へたるとなむ。

(桐壺・五〇頁)

これらの「光る君」については、先行研究では様々な考察があり、例えば、二つの本文における世の人から「光る君」と高麗人から付けた「光る君」という矛盾があり、いわば「光の喩は皇位から絶望的な距離をもうけられた主人公が、にもかかわらず王権を具現するという、ありうべからざる物語と相渉し、その推進力とも捉え返されてくる。」<sup>(20)</sup>、また漢文学に関する代表的な考察は、新聞一美の指摘がある。それは次の「長恨歌」の詩句である。

姉妹弟兄皆列レ土 可レ燐光彩生ニ門戸一

と描く。これらの「光」を人格化した時、そこに「光君」や「かかやくひろ宮」が生み出されたのではないであろうか。<sup>(21)</sup>

作者の紫式部が桐壺巻の中で繰り返し「長恨歌」を引用していたので、新聞一美の指摘は否定できないが、「長恨歌」の詩句だけで、「光る君」を解釈する場合、もの足りないところが見える。例えば、詩句の「光彩」の「光」があるが、「君」が見えない。この点については、前述したように、悲しむ桐に関する意象論から見ると、つまり白居易が元稹の「桐花」詩に対して「答二桐花一詩」の詩句の意象はもつと相応しいのではないだろうか。確認のため、再び詩句を取り上げてみよう(注(28・29)参照)。

当三君正殿栽一 君が正殿の栽に当つれば、

花葉生ニ光晶一 花葉に光晶を生ぜん。

すなわち作者の紫式部が意識して悲しい「桐」の意象を受けて、悲恋である桐壺帝と桐壺更衣の物語を暗喩したとともに、桐壺帝と桐壺更衣の間の深愛した兆しの物語の主人公である源氏の素晴らしい将来を象徴

しているのである。それは藤壺の「かかやく日の宮」と源氏の「光る君」の物語を暗喩していると理解される。まさに「桐」は春になると、立派な素晴らしい葉が光晶のように生えてゆくだろう。

例えば、当時の有名なウイキペディアのような類書である『芸文類聚』巻八八「桐」に収録された沈約「悲落桐」の賦作は、自らの『紫式部日記』に記した真名の力と漢文世界の視野から推測すると、下記の「悲落桐」に関わる春の桐の素晴らしい光景の意象について、紫式部は知っているはずであろう。

悲落桐 桐を落とすを悲しむ

落桐早霜露<sup>(32)</sup> 桐を落とす、早き霜露<sup>(33)</sup>

秋になると、孤立の桐の葉が落ちて、冷たく厳しい霜や露らが直接裸の桐の樹幹に浸透する。如何なる孤立を悲しむ「桐」の意象が目の前に表している。ところが、春になると、新しい立派な素晴らしい光景が来るはずである。

若逢<sup>(34)</sup>三陽春一至 陽春至りて逢ひ若し、

吐<sup>(35)</sup>レ緑照<sup>(36)</sup>三清潯<sup>(37)</sup> 緑を吐いて清潯を照らす。

いくら酷い霜や雪などの過酷な不幸に襲われ、いくら悲しむ苦痛を受けても、結局、暖かい春が来たら、立派な緑になるはずであろう。

作者の紫式部が、悲しい孤桐の意象を受けて、文学的に強いて悲恋である桐壺更衣の宮廷の庭の中に「桐」を植えて、悲劇的な物語を暗喩する「桐壺」を設定した。また悲しむ「桐」の反面、春になると、立派な素晴らしい葉を生える光景の意象を受けて、桐壺帝と桐壺更衣の間に生まれた源氏と、桐壺更衣と似ている藤壺と一緒に輝く将来を暗喩している。具体的には、それは物語の展開した後、光る君の源氏と輝く日の宮の藤壺の間に生まれた子供が将来の天皇になることを暗喩しているのでは

ないだろうか。

## 六 おわりに

以上、『源氏物語』「桐壺」巻における「桐」について、古代中国の文学理論である意象論の視点から考察してきた。まず提起した疑問は、従来研究ではいわゆる「桐壺」は史実の淑景舎の通称の問題を考察した。その結果、『源氏物語』以前、例えば『枕草子』には八回「淑景舎」が登場しているが、一回も「桐壺」が出なかったように、現時点の文献ではどこにも「桐壺」が見えず、すなわち最初に「桐壺」を淑景舎の名称に付けたのは、紫式部である。この点については明らかにしたと思われる。まためて言えば、あくまでも桐壺は淑景舎の通称の始発は、『源氏物語』「桐壺」であることは間違いないだろう。つまり史実の淑景舎は「淑景舎」の名称しか使わず、少なくとも『源氏物語』成立の直前では、「桐壺」の名称が存在してこなかったことを明らかにした。要するに、平安時代では「桐壺」は史実の淑景舎の名称ではなく、作者の紫式部が文学的に作られたものである。

では、なぜ作者の紫式部は「淑景舎」の中に「桐」を植えたのか。この点について、意象論の視点から考察してきた。

意象論は古代中国の文学理論の一種である。意象論の起源は『易経』である。文学理論としての意象論の対象は、あらゆる世の中の事物、自然物、動物などの表象である。ただこれらの表象は単に映すだけではなく、作者の意識や情緒が浸透した意象である。つまり「桐壺」は、文学的に作られたものである。すなわち作者の紫式部が創出した「桐」は、古代中国の文学理論である意象論の手法で、悲しい「桐」の意象を受け

て、とりわけ白居易の「桐」を宮庭に移植する意象を受容した結果と考察した。また春の「桐」の生い茂る意象と桐壺帝と桐壺更衣の間に生まれた「光る君」が素晴らしい将来を象徴する意味を考察した。

注

- (1) 代表的な論文や論集は次のようになる。①三谷邦明「桐壺——源氏物語の方法の出発点として——」山岸徳平・岡一男『源氏物語講座 各巻と人物Ⅰ』第三卷(有精堂、一九七一年)。②河添房江「光る君の命名伝承をめぐって——王権譚の生成・序——」『中古文学』第四十号、一九八七年一月。③新聞一美「桐と長恨歌と桐壺巻——漢文学より見た源氏物語の誕生——」『源氏物語と白居易の文学』(和泉書院、二〇〇三年)。④森一郎「桐壺帝と桐壺更衣の形象」『中古文学』第七十二号、二〇〇三年一月。⑤原岡文子「「いはけなき」光る君の登場をめぐって」日向一雅・仁平道明『源氏物語の始発——桐壺巻論集』(竹林舎、二〇〇六年)。
- (6) 阿部好臣「第一章 桐壺・若紫——始発の物語」『物語文学組成論Ⅰ 源氏物語』(笠間書院、二〇一一年)。⑦伊井春樹「桐壺院の贖罪」『中古文学』第九十九号、二〇一七年六月。⑧新聞一美「源氏物語の巻名と漢詩文——「桐壺」「帚木」など」『和漢比較文学』第六十卷、二〇一八年二月。
- (2) 例えば、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館) 頭注では次のように解説している。「桐壺は後宮五舎の一、淑景舎いさげの通称。壺(庭)に桐を植えた。帝の居所、清凉殿から最も遠い東北隅なので、「あまたの御方々を過ぎさせたまひて」となる。二〇頁。また『国史大辞典』(吉川弘文館)の「淑景舎」の項目でも次のように解説している。「平安宮内裏の後宮の五舎の一つで、清凉殿からは最も隔たり、内裏内郭の東北隅にあった。『源氏物語』などには「しげいさ」と記し、『拾芥抄』は「シツケイ」と訓ませる。その壺庭に桐を植えてあったので桐壺とも呼んだ。」七二〇頁。
- (3) 黒板勝美『新訂増補国史大系 日本紀略 後篇・百鍊抄』(吉川弘文館、一九六五年) 一七二頁。

- (4) 渡辺直彦・厚谷和雄『史料纂集 権記』(続群書類従完成会、一九八七年) 一九四頁。
- (5) 倉本一宏『藤原行成「権記」(中) 全現代語訳』(講談社、二〇二二年) 二二八頁。
- (6) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 小右記』(岩波書店、一九五九年) 一六三頁。
- (7) 倉本一宏『現代語訳 小右記 道長政権の成立』二(吉川弘文館、二〇一六年) 二四頁。
- (8) 前掲(6) 同、二頁。
- (9) 倉本一宏『現代語訳 小右記 道長政権の成立』一(吉川弘文館、二〇一六年) 二二頁。
- (10) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 御堂関白記』(岩波書店、一九五二年) 二九七頁。
- (11) 倉本一宏『藤原道長「御堂関白記」全現代語訳』上(講談社、二〇〇九年) 六七頁。
- (12) 前掲(10) 同、二五五頁。
- (13) 倉本一宏『藤原道長「御堂関白記」全現代語訳』中(講談社、二〇〇九年) 三七六頁。
- (14) 狩谷掖斎『箋注倭名類聚抄』(全国書房、一九四三年) 七頁。
- (15) 石川忠久『新釈漢文大系 詩経』上(明治書院、一九九七年) 一四〇頁。
- (16) 今井宇三郎等『新釈漢文大系 易経』下(明治書院、二〇〇八年) 一五四八頁。
- (17) 戸田浩暁『新釈漢文大系 文心雕龍』下(明治書院、一九七八年) 三九六頁。
- (18) 盧盛江『文鏡秘府論彙校彙考』(中華書局、二〇〇六年) 一三六五頁。
- (19) 藤井貞和『古典講読シリーズ 源氏物語』(岩波書店、一九九三年) 二九頁。
- (20) 岡村繁『新釈漢文大系 白氏文集』二下(明治書院、二〇〇七年) 八一三頁。
- (21) 川口久雄『日本古典文学大系 菅家文章 菅家後集』(岩波書店、一九七一年) 四七四頁。
- (22) 新聞一美『源氏物語と白居易の文学』(和泉書院、二〇〇三年) 九八頁。
- (23) 加藤常賢『新釈漢文大系 書経』上(明治書院、一九八三年) 七三頁。
- (24) 岡村繁『新釈漢文大系 白氏文集』一(明治書院、二〇一七年) 一五八〜一五九頁。
- (25) 冀勤『中国古典文学基本叢書 元稹集』(中華書局、一九八二年) 七頁。

- (26) 前掲(24) 同、四七〇頁。
- (27) 朱金城『中国古典文学叢書 白居易集箋校』中国・上海(上海古籍出版社、一九八八年) 一一五頁。(ただし、日本の漢字に直した)
- (28) 前掲(24) 同、四六六頁。
- (29) 右同、四六八頁。
- (30) 河添房江『源氏物語の喩と王権』(有精堂、一九九二年) 一五〇頁。
- (31) 前掲(22) 同、九五頁。
- (32) 欧陽詢『芸文類聚』(上海古籍出版社、一九九九年) 一五二九頁
- (33) 橘英範「青春の花——元白詩における桐」『中国文史論叢』第十四号、二〇一八年三月、六五頁。
- (34) 前掲(32) 同。